

スピーカー工作のセオリーは無視。「その作り方、音に悪い」と言われても気にしない。デザイン優先で、誰も見たことがないようなスピーカーを作りた。ひねくれ者のオーディオマニア、編集部吉野と家具職人の岸氏による、新感覚オーディオクラフト連載。

デザインも音も最高のスピーカーを手に入りたい。世界で一つだけの一生モノのスピーカーが欲しい。では自分にとって、理想のスピーカーとは？

それは、製品では巡り会えないオリジナルテイ溢れるデザインと、自分の好きな音の方向性を両立させること。そのためには、いま音が良いといわれているスピーカークラフトのセオリーに制限された中では不可能で、あえてセオリーから脱線した邪道な方向で、新たな独創的な音を作り上げたい。そんな無謀な挑戦をしたい、という、超個人的な理由から半ば強引にスタートさせたのが本企画。具体的にどの辺が邪道かと言うと

邪道その1 音は二の次、デザイン第一

音が良いとされるセオリーから設計すると、どうしてもある程度決まった大きさ、形状に集約される。それでは新たな音は望めない。まずはデザインありきで、そこからどのように音質的に向上していけるかという、逆転的発想で作ってみたい。

邪道その2 自分では作らない

仕上りのクオリティを考えると、工作素人の自分が作るより、オーダーメイドでプロに頼んで確実に作る。そして、プロならではの技で新たな手法に挑戦したい。

邪道その3 セオリーは無視、 原音再生も興味なし

スピーカー設計の計算式などは無視。実際に聴きながら作っていく。さらに最高のスピーカーのために、音質的にクセが強いといわれる、無垢材で作る、その響きを積極的に利用した箱鳴りスピーカーを作る。楽器には無垢材が使用されている、楽器的な積極的に音を奏でるようなスピーカーを作る。

大まかにいうと以上の3点だ。失敗する可能性が高いことは承知だが、もしこれでうまくいけば、斬新な自作スピーカーが完成するかもしれない。この無謀な挑戦に協力してくれるのは、神楽坂で無垢材のオーダーメイド家具

新連載 新感覚オーディオクラフト

俺流スピーカー! 邪道を往く

第1回
スピーカーは邪道で行こう!

ステレオ編集部 吉野 × アクロージュファニチャー 岸邦明



Braun L2
1958年発売。ディーター・ラムスによるデザイン。単純にこのスピーカーが欲しかったけど、とてもレア(中古で50万/1本)で無理。ならば作ってしまえというのが動機です

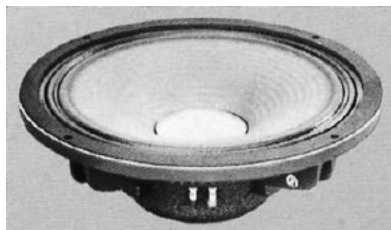
理想のデザインと音

自分が今まで知っているスピーカーの中で、一番グッときたデザインは、ドイツのブラウンのL2というスピーカーだ。1958年発売のモノラル時代のスピーカーで、かの名インダストリアルデザイナー、ディーター・ラムスがデザインしたものだ。パツフルのウーファアの部分を見てほしい。正方形の白いパツフルの中心にウーファアが入っている。そしてその脇にトウイーターのエリア。今的な考えからすると、正方形のパツフルの中心にユニットというのは、セオリーからすればN



JBL 2405

20kHzくらいまでは鳴らしたい。ホーンの元気な音に憧れはあるが、実際は雰囲気重視で鳴らしたいので、無難な2405をチョイス



JBL D123

50年代のスピーカーユニット。ワイドレンジは求めない。フルレンジで美味しい音を鮮度よく鳴らしたい。我が家では30cmがサイズの丁度いいのでチョイス。能率は98dB(1kHz)、スペック上は30~15kHz



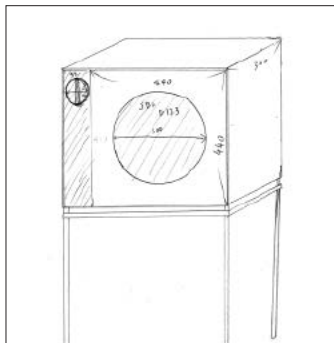
JBL Harkness

50年代にJBLから発売されたD130が搭載されたスピーカー。横型のデザインが素晴らしいが、38cmはやはりデカイ。アイディアだけいただこう

Gだ。しかし、それが逆に新鮮で美しいデザインに写る。ただL2を単純にコピーしただけでは、面白くないのでオマージュしたスピーカーデザインとしたい。

では、その箱に組み合わせるスピーカーユニットはどうするか。ブラウンL2はドイツのスピーカーだが、音に關しての好みは自分は断然アメリカ派だ。自分は主に40年代から70年代のソウル、ブルース、ロック、ジャズといったアメリカのギター音楽が好きだ。カラッとしたアメリカンな音を大らかに届託なく鳴らしたい。それに適しているのはギターアンプなどでも使われたJBLの名機38cmフルレンジD130だろう。しかし38cmは自宅では大きすぎるので、30cmのフルレンジD123をチョイスした。D123は高域が約14kHzしか出ない。それでは現代の音源を再生するのは難しいので、D123をフルレンジとして使い、プラスアルファで、無難なホーントウイーターJBL L2405をコンデンサー1発で追加することにした。

ドイツのスピーカーデザインとアメリカのユニットの組合は邪道だが、好きなデザインと好きな音で挑戦したい。



Braun L2とJBL Harknessを足して2で割ったような、邪道スピーカーを描いたラフスケッチ

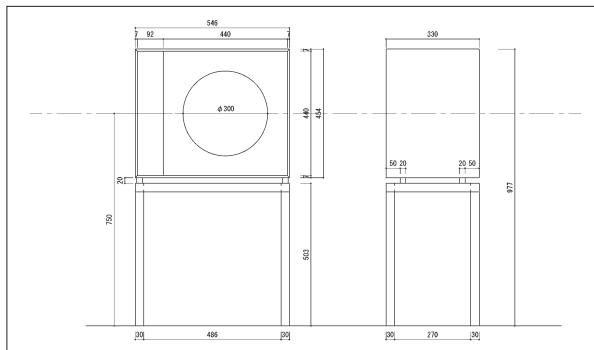
まずはラフスケッチを描く

ブラウンL2のデザインを踏襲しながらも、同じでは面白くないので、あえてスピーカーを横向きにしてみたい。L2はバツフルが白で、側板は木目調というデザイン。そのコントラストを無垢材で再現するために、バツフルはメイプル、キャビネットはブラックウォールナットで作ってみたい。横向きに配置するとすると、脚の高さもある程度必要になる。高さは仮に80cmで考えたが、これがなんとも新しく面白い。このラフスケッチを元に、アクロージュ岸氏に図面を起こしてもらった。

さて邪道スピーカーは果たして成功するのか？ 岸氏とともに試行錯誤しながら作り上げていくので、次号以降もお付き合いいただければ幸いです。



邪道と言えども、無垢材は高価。失敗は許されない。打合せは入念に行なう
アクロージュファニチャー <http://www.acroge-furniture.com/>



ラフスケッチを元に、岸氏が図面を起こす

SPクラフトマスターの辛口コメント 普通はユニットの鳴り方を考えながら箱の設計・デザインを決めていく。板厚も大事だし、留め加工の場合は、無垢板だと反って隙間もできやすいので四方留めよりは上部留めにし、底部はイモの方が強度が出る。バツフルと側板で樹種が違うということは木の伸縮率も違うので仕上げも考えた上での納まりや組立をしないと綺麗に仕上がらないだろう。納まり、仕上げを含めてこれから見ものだ。